

ゼフィルスの採卵法

母蝶からの採卵
夏場の卵保管法

作成：2006.4.27 仲西周二



オオミドリシジミの卵

ゼフィルス類の人工採卵は先人の工夫により既にかなり普及済みであるが、実際にやってみると面白いものの各種の難点があって、まだまだ改良の余地があると感じる。例を挙げれば、採卵適期の母蝶の採集、手の掛からない母蝶の長期生存法、種によって異なる好みの産卵環境、卵の越夏法などである。

普通種ではあるがオオミドリ、エゾミドリ、ゼフではないがリングシジミの採卵を試みた。前2種は共に1母蝶から80卵強を、リングは2母蝶から約100卵を採卵できたので、その方法を纏めてみた。

秋口以降の野外採卵と異なり、これら人工採卵の卵は盛夏の候から人工的に保管・管理を行う必要があり、後半ではその方法について述べた。

母蝶の採集

リングシジミ 2♀：2006.6.27 札幌市、仲西周二採集

オオミドリシジミ 1♀：2006.7.23 山中湖村梨ヶ原、会友の雨宮範正氏の採集品を譲受

エゾミドリシジミ 1♀：2006.8.11 長野県清里町、仲西周二採集

これらの母蝶はいずれも標本に出来る鮮度であり、腹部は大きく膨らんでいた。リングシジミ 1♀は産卵行動(?)中のものを採集した。

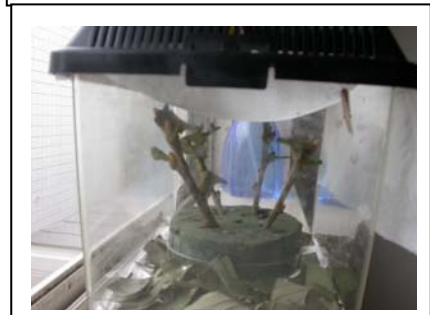
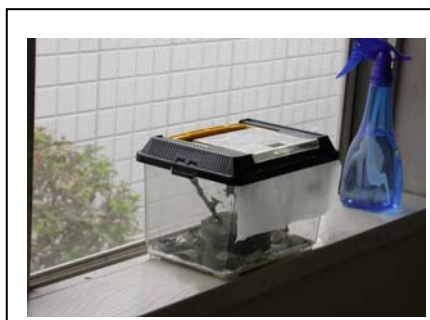
母蝶は以下に説明する昆虫飼育ケースに收容し、採集及び移動中に弱らないように気をつけて持ち帰った。

採卵装置概要 (写真参照)

容器には、透明なプラスチック製の昆虫飼育ケースを使用した。ホームセンターなどで、200円ぐらいで販売されている。

ブラジャーレ(底)にオアシスを嵌め込んで吸水させ、これに産卵用の食樹切枝を挿して容器内にセットした。切枝は容器の四隅上部に向かって斜めに傾斜した配置とし、葉は適当数を残して除去もしくは切り詰め、切枝の先端は器壁や天井から少し離れた。

容器底部にはキッチンペーパーを折りたたんで敷き、十分に水を含ませた。底のキッチンペーパー及び食樹を挿したオアシスの表面が露出しないように、切除した食樹の葉を丁寧に敷き詰めた。



ケースの蓋と本体との間にキッチンペーパーを挟み込み、これにポカリスウェット 50%希釈液などの餌をしみこませた。容器の天井全体が餌台となり、この部分によく静止する母蝶が随時吸餌出来る環境とした。

採卵用食樹切枝には、オオミドリは分岐に富むアラカシの1～2年枝、エゾミドリはミズナラの休眠芽を含み分岐に富む1年枝、リンゴには分岐に富むスモモの1～2年枝を用いた。

採卵

採卵装置は直射日光を避けた比較的涼しい場所として、屋内北側で階段上の窓枠に置いた。窓は終始開放（冷房環境ではない）してあり、網戸を通した裏の建物壁からの反射光で十分明るいと判断した。

採卵装置中に母蝶を放し、1日目朝にポカリスウェット 50%希釈液を与え、昼と夕方に浄化水（市販の活性炭吸着）をスプレーしてキッチンペーパー餌台の湿潤状態を維持した。2日目、3日目は浄化水スプレーのみで湿潤状態を維持するに留めた。餌の希釈液は蒸発により養分が濃縮されるので、追加は不相当と考えた。

母蝶は初め落ち着かない様子であるが、環境に慣れると吸餌したり食樹に飛び移って枝を触角で叩くなどの動作を始める。オオミドリは翌日、エゾミドリもセット2日後には産卵を開始した。透明な器壁を通じて産卵直後の真っ白な卵は良く目立ち、順次増えて行くのを見るのは楽しいものである。

4日目にキッチンペーパーを新しいものに替えて希釈餌を与え、以後同じ操作を繰り返した。養分と湿度に富むキッチンペーパー餌台はカビが生えやすいので、極力新鮮・清潔に保ちたいと考えての交換である。この間母蝶は別容器に収容しておくが、自ら容器に移らせるなどして母蝶を驚かさないように取り扱う。

これから先は母蝶をどれだけ健康で長生きさせられるかが採卵成功への鍵であり、母蝶の衰弱や事故死の予防に気をつける。容器内を乾燥させない（母蝶は乾燥に弱い）、器壁に水滴があると母蝶の羽が付着して動けない、器壁と切枝や葉の間隔が狭いと挟まれて動けない、底に敷いた食樹の葉が乾燥して丸まると母蝶が挟まれて動けない、などに注意を払う。底に敷いたキッチンペーパーやオアシスへの水の補給、食樹敷葉の交換なども適宜行う。食樹の葉を敷く意味であるが、容器内に食樹の匂いを満たして母蝶の産卵気分を高揚させるほかに、濡れたキッチンペーパーやオアシスへの羽の付着防止、更にはこの部位への産卵防止などの目的がある。手入れを怠って露出していたオアシスにエゾミドリ母蝶が産卵していたが、気付くのが遅れ、オアシスの枝痕孔の中に産卵された約20卵の保管を持て余している。

採卵に使用する切枝には、母蝶が産卵しやすい条件を用意したい。枝に残す葉は母蝶が器壁や天井から枝に飛び移る際の足場であればよく、目安として一枝に2～3枚程度でよい。母蝶の枝上での行動を観察すると、特定の場所に来ると決まって枝を離れるなどして、結果として多く産卵される枝とほとんど産卵されない枝の差が生じる。母蝶が歩きたい部分を葉が邪魔しているなどその原因があり、こういった障害は見つけ次第除去してやる。

又、気に入った切枝に産卵が集中する結果、卵が重なって産卵される場合がある。下になった卵からは孵化時の幼虫の脱出が困難であるので、ある程度産卵された切枝は新しいものとの交替が必要である。

今回取り上げた3種では2週間も産卵を続ければ母蝶の腹部はペッチャンコとなり、ほぼ産卵終了である。それだけに産卵適期の母蝶の採集時期が重要と思う。経験はないが腹中の卵を熟成させながら産卵を続ける種類（例えばルーミスジミなど）では、短期間に纏めて多数を産卵することはなく、1月以上など産卵が長期に渡ると聞いている。産卵終了と判断した母蝶は、沢山産卵してくれたことへの感謝を込めて、十分給餌後に庭の植え込みに開放している。

卵の夏場の管理

リンゴシジミは7月から、オオミドリ、エゾミドリでも8月から、10月半ばに冷蔵庫保管に移行するまで、卵の夏場管理が重要である。この保管方法が不適切であると、春に全く孵化しない。乾燥に弱いメスアカミドリ卵などは、何もせずに半月も室内に放置すると、春の孵化はほとんど期待できない。

自然状態で卵は涼しい林の日陰部分で食樹の生きた枝上にあり、降雨や夜露により絶えず水分（もしくは空中湿度）の供給があると考えられる。対して自宅庭では、日陰の場所でも高温で乾湿の変動が激しく、高温の蒸れ状態から乾燥状態までの繰り返しである。

リンゴ採卵でお世話になった北海道の蝶友に話を聞いて、家の北側の樹木の下枝に袋に入れたリンゴ卵を吊り下げてみたが、結果は芳しくなかった。半月後の点検で枝がカラカラに乾いており、卵の幾つかは厚さが薄くなった気がした。1月後の点検でこの傾向が顕著であり、急遽方法を変更したが、この時点でリンゴ卵は保管に失敗した気がしている。

会友早坂氏の紹介で、相蝶会の飼育の大ベテラン庭野氏に相談した。庭野氏は屋内環境でゴース製吹流しに産卵枝を収容し、毎日欠かさず水をスプレーし、最大の課題である蒸れに注意しているとの事であった。

この方法を伺って私が試みたやり方は、次の通りであり、写真を参照して戴きたい。プラ容器に前述のオアシスを詰めて水を吸わせ、これに産卵枝を挿し立て、毎日欠かさず水をスプレーした。置き場所は冷房された居間とし、水が垂れるのでオアシス容器ごと大き目の蓋なしプラ容器中に置いた。ゴース製吹流しでは枝とゴースの接触部に乾燥するまでの期間水が保持されるが、オアシスに挿し立てた



枝には水の保持がない。この分、枝と枝の間隔を詰めて挿し、更に容器の底に溜まる水もそのままにしてこの代わりと考えてみた。10月半ばに冷蔵庫に収容した時点で、オオミドリ、エゾミドリの卵は健全であると思われた。来春の結果が楽しみである。

以上